

奄美群島地域

土地分類基本調査

沖永良部島・与論島

5万分の1

国土調査

鹿児島県

1986

序 文

調査地域は、鹿児島県本土の南方約460kmの洋上に位置し、奄美群島中3番目に大きい沖永良部島94.5km²とその南方31kmに位置する与論島20.8km²であります。

本地域については、県総合計画、奄美群島振興計画によって、交通体系の整備、社会生活環境施設等の整備、農業基盤の整備等を進めております。

平坦地の多い地形に恵まれた沖永良部島、与論島とも耕地率（43.5%、51.9%）と高く、さとうきびを中心に輸送野菜、花き、畜産との複合経営が確立されていますが、畑地帯総合土地改良事業やかんがい排水施設の整備による農業経営の安定化を図っております。

エラブユリとフリージアと鍾乳洞の沖永良部島、東洋の海に浮かぶ1個の輝く真珠といわれ、澄んだ海と空と果しなくつづく白浜の与論島、ともに観光資源に恵まれている。しかし、海外、沖縄への観光客の流出により、一時の離島ブームに比べ、観光客の減少が続いており、観光の活性化を図るため、観光リクレーション施設の整備を進める必要があります。

本調査は、地形、表層地質、土壌等の自然条件及び土地利用現況等を科学的かつ総合的に調査したものです。

今後、この地域の土地利用計画や各種の企画立案に際し、基礎資料として広く御活用していただければ幸いです。

なお、この調査にあたって、資料の収集、図簿の作成等に御協力いただいた関係者の方々に深く感謝申し上げます。

昭和61年9月

鹿児島県企画部長

笹田 昭人

まえがき

- 1 本調査は国土調査法（昭和26年6月1日法律第180号）第5条第4項の規定により、国土調査法の指定をうけ、国土庁の国土調査費の補助金に依り、鹿児島県が事業主体となって実施したものである。なお、土壤生産力区分図、起伏量図については県単独事業として実施した。
- 2 本調査成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定に準ずる土地分類図及び土地分類調査簿である。
- 3 調査は国土調査法土地分類基本調査の下記作業規程準則に準拠して作成した「鹿児島県奄美群島地域土地分類基本調査作業規程」に基づいて実施した。
 地形調査作業規程準則（昭和29年7月2日総理府令第50号）
 表層地質調査作業規程準則（昭和29年8月21日総理府令第65号）
 土じょう調査作業規程準則（昭和30年1月29日総理府令第3号）
- 4 調査の実施、成果の作成関係者は下記のとおりです。

総合企画・指導	国土庁土地局国土調査課	堀野 正勝
	〃	初倉 克幹
企画・調査・連絡	鹿児島県企画部開発調整課	福村 紀男
	〃	前野 昌徳
	〃	湯川 秀昭
地形分類	鹿児島大学法文学部	米谷 静二
	〃	石村 満宏
表層地質	鹿児島大学理学部	露木 利貞
土じょう	鹿児島県農業試験場	穂原 関雄
	〃	林 政人
	〃	大島支場 小原 秀雄
	〃	〃 友野 育造
	鹿児島県林業試験場	瀬戸口 徹
		寺師 健次
土地利用現況	鹿児島県企画部開発調整課	前野 昌徳

土壤生産力区分

鹿児島県農業試験場

穂原 関雄

〃

林 政人

〃

大島支場

小原 秀雄

〃

〃

友野 育造

鹿児島県林業試験場

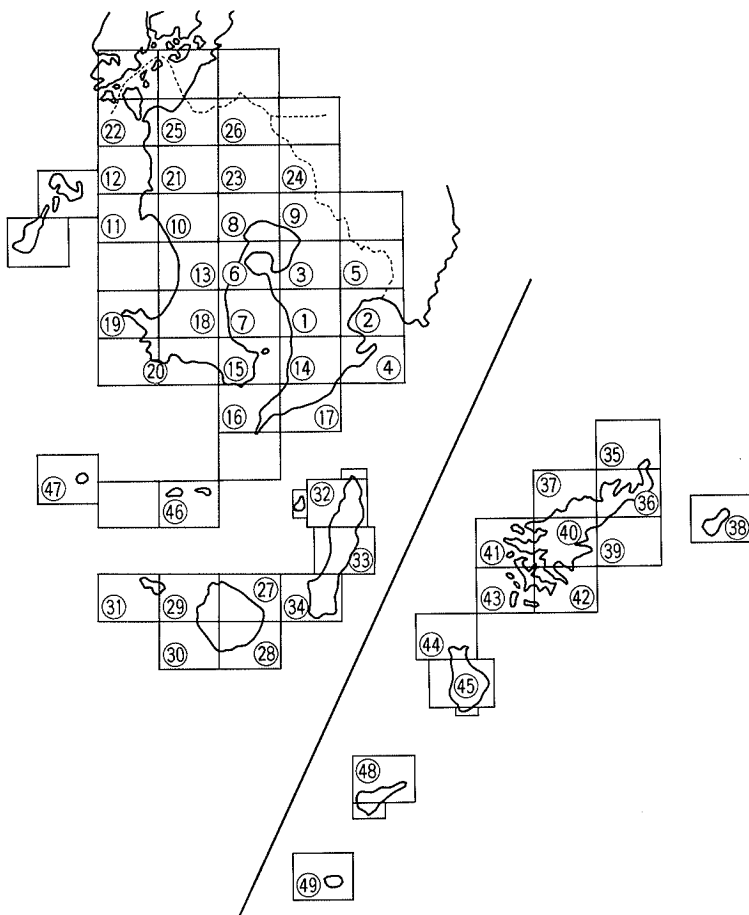
瀬戸口 徹

寺師 健次

鹿児島県企画部開発調整課

前野 昌徳

5 土地分類基本調査実施状況 (成果印刷年度)



土地分類基本調査実施図幅一覧

年度	調 査 対 象 図 幅	備 考
45	①鹿屋 ②志布志	
46	③岩川 ④内之浦 ⑤末吉（県域のみ）	末吉図幅は県単独事業
47	⑥鹿児島 ⑦垂水 ⑧加治木 ⑨国分	
48	⑩川内 ⑪羽島 ⑫西方 ⑬伊集院	
49	⑭大根占 ⑮開聞岳 ⑯佐多岬 ⑰辺塚	
50	⑱加世田 ⑲野間岳 ⑳枕崎・坊	
51	㉑宮之城 ㉒阿久根	
52	㉓栗之 ㉔霧島山（県域のみ）	
53	㉕出水（県域のみ） ㉖大口（県域のみ）	54年度印刷，大口図幅に加久藤，佐敷図幅の鹿児島県域を合併
54	㉗屋久島東北部 ㉘屋久島東南部 ㉙屋久島西北部 ㉚屋久島西南部 ㉛口永良部島	55年度印刷，5 図幅合併
55	㉜種子島北部 ㉝種子島中部 ㉞種子島南部	56年度印刷，3 図幅合併
56	㉟笠利崎 ㊱赤木名 ㊲名瀬 ㊳喜界島 ㊴小湊	57年度印刷 小湊は58年度印刷
57	㊵西古見 ㊶湯湾 ㊷請島 ㊸古仁屋	58年度印刷
58	㊹山 ㊺亀津 ㊻薩摩黒島 ㊼薩摩硫黄島	59年度印刷，薩摩黒島，薩摩硫黄島は60年度印刷
59	㊽沖永良部島 ㊾与論島	61年度印刷

奄美群島地域

土地分類基本調査

沖永良部島・与論島

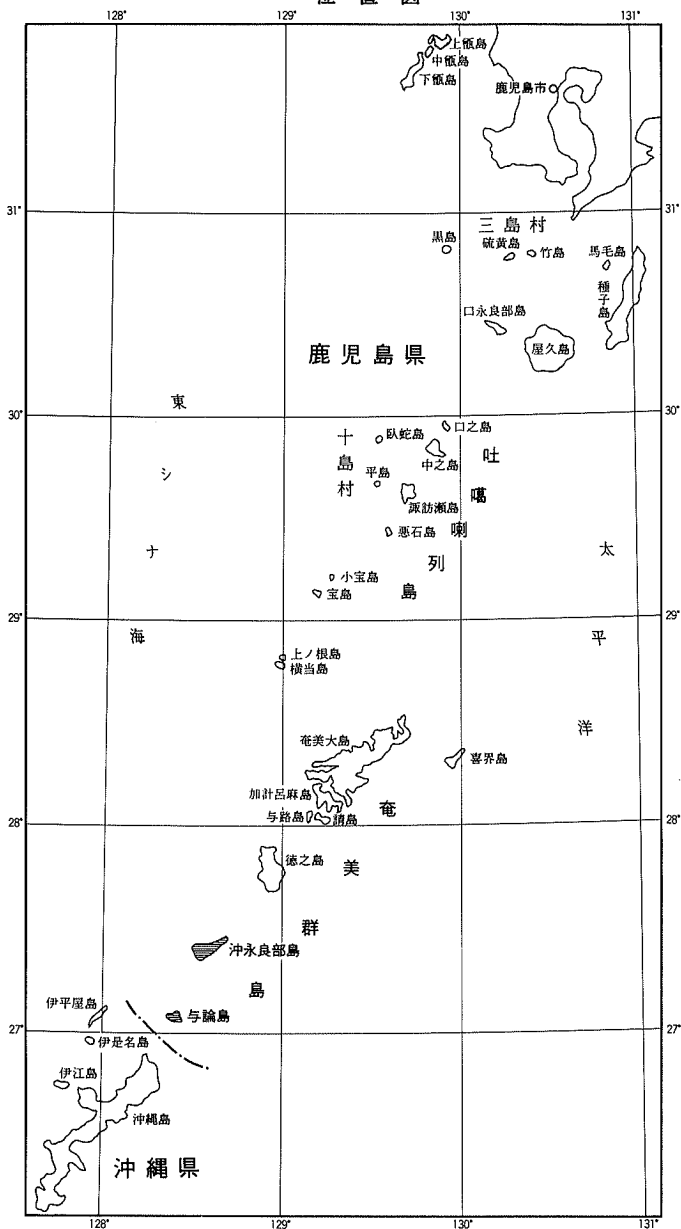
5 万分の 1

国 土 調 査

鹿 児 島 県

1 9 8 6

位置図



目 次

序 文

まえがき

総 論

I 位置および行政区界	1
II 人 口	2
III 図幅内の地域の特性	4
IV 主要産業の概要	6

各 論

I 地形分類	11
II 表層地質	14
III 土 壌	20
IV 土地利用現況	24

〔地 図〕

地形分類図 表層地質図 土壌図 傾斜区分図
土地利用現況図 土壌生産力区分図 起伏量図

総論

I 位置及び行政区界

〔沖永良部島〕

位置：沖永良部島は、九州と台湾の間に北北東—南南西に孤状に連らなる南西諸島のほぼ中央部、鹿児島県本土から約460km、沖縄本島から58kmに位置する。

「沖永良部島」図幅の経緯度は、東経128° 30′ ～128° 45′，北緯27° 19′ ～27° 30′の範囲であり、面積は94.5km²である。

行政区界：沖永良部島の行政区界は、図I-1に示すとおりで、大島郡和泊町、知名町の2町よりなる。

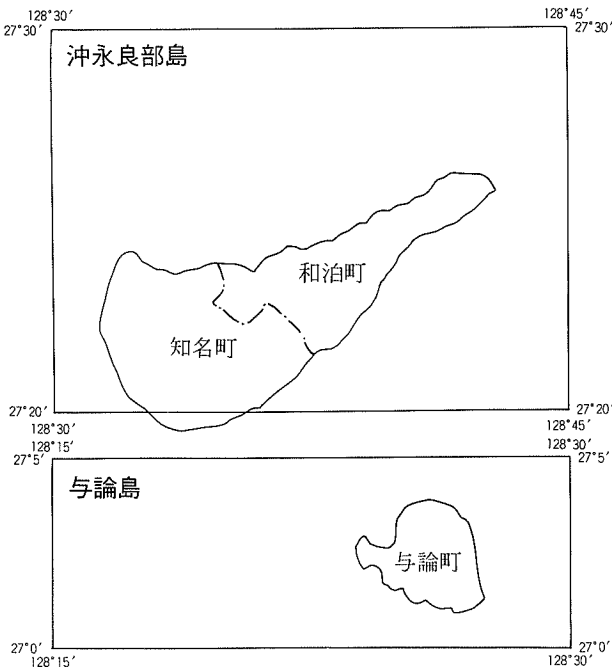
〔与論島〕

位置：与論島は、沖永良部島から約31km、沖縄本島から22.6kmとほぼ中間に位置し、鹿児島県本土から南南西に約500kmも離れている。

「与論島」図幅の経緯度は、東経128° 15′ ～128° 30′，北緯27° 0′ ～27° 10′の範囲であり、面積は20.8km²である。

行政区界：与論島の行政区界は与論町だけからなる。

図I-1 行政区界



Ⅱ 人 口

〔沖永良部島〕

調査区域の行政区域内人口は、和泊町、知名町の17,339人である。

当地域の昭和55年10月の人口は、昭和45年10月及び昭和50年10月の国勢調査の結果と比べてみると増減率で、昭和45年比4.8%減、昭和50年比2.7%増となり、過疎化に歯止めがかかってきている。

表Ⅱ-1 地域の人口

市町村名	昭和55年（10月1日現在）				人口増減率(%)		行政区域 面積 (km ²)
	世帯数	人 口 (人)			対	対	
		総数	男	女	45年	50年	
和泊町	2,736	8,932	4,180	4,752	△ 6.0	3.7	41.2
知名町	2,712	8,407	4,007	4,400	△ 3.4	1.7	53.4
合 計	5,448	17,339	8,187	9,152	△ 4.8	2.7	94.6

注) 昭和55年 国勢調査による。

昭和55年の地域内の産業構造は、第1次産業就業者が52.4%、第3次産業就業者33.2%、第2次産業就業者14.4%となっているが、農業が盛んで、第1次産業就業者が半数を越え、第2次産業就業者が少ないのが特徴的である。

業種別では、農業、卸売業・小売業、サービス業、建設業、製造業、公務、運輸・通信業の順である。農業は両町とも断然トップで51.8%と群を抜いている。卸売業・小売業は11.6%で2位、サービス業11.4%で3位であり、両町とも1～3位の順位は同じである。4位の建設業は両町とも5位に位置し、5位の製造業は和泊町では4位、知名町では6位となっている。公務は全体で6位であるが、知名町では航空自衛隊の大山基地があるため、4位となっている。

昭和50年に比較して、当地域の就業者数は7.8%の増であり、産業別では第2次産業就業者が19.2%、第3次産業が16.0%、第1次産業が1.2%の増となっているが、構成比は第3次産業が2.4%、第2次産業が1.1%の増で、第1次産業が3.4%の減となっている。

表Ⅱ-2 就業構造

市町村名	就業者数(人)				就業構造(%)		
	第1次 産業	第2次 産業	第3次 産業	計	第1次 産業	第2次 産業	第3次 産業
和泊町	2,503	655	1,461	4,620	(57.0) 54.2	(14.3) 14.2	(28.6) 31.6
知名町	2,012	581	1,397	3,993	(54.6) 50.4	(12.1) 14.6	(33.2) 35.0
合計	4,515	1,236	2,858	8,613	(55.8) 52.4	(13.3) 14.4	(30.8) 33.2

注) 昭和55年国勢調査による。()内の数字は昭和50年国勢調査による。

分類不能の産業を含む。

[与論島]

調査地域の行政区域内人口は、与論町の7,320人である。

昭和55年10月の人口は、昭和45年10月及び昭和50年10月の国勢調査の結果と比べてみると増加率3.2%、5.0%となっており、昭和45年を底に増加に転じている。

表Ⅱ-3 地域の人口

市町村名	昭和55年(10月1日現在)				人口増減率(%)		行政区域 面積 (km ²)
	世帯数	人口(人)			対 45年	対 50年	
		総数	男	女			
与論町	1,883	7,320	3,440	3,880	3.2	5.0	20.8

注) 昭和55年 国勢調査による。

昭和55年の地域内の産業構造をみると、第2次産業就業者が37.4%、第3次産業就業者が34.5%、第1次産業就業者27.9%であり、大島紬製造業を主体とする製造業が高いため、第2次産業の割合が高くなっている。

業種別では、製造業、農業、サービス業、卸売・小売業、建設業、公務、運輸・通信業等の順である。製造業の30.5%、農業の27.0%が他を引き離して、3位のサービス業15.6%、4位の卸売・小売業12.0%等が多い。

昭和50年に比較して、就業者数は0.2%の減であり、産業別では第1次産業が1.4%の減で、第3次産業が46.9%、第2次産業が1.0%の増となっているが、構成比は第3次産業のみが8.0%の増で、第2次産業が4.3%、第1次産業が4.0%の減となっている。

表Ⅱ－4 就業構造

市町村名	就 業 者 数 (人)				就 業 構 造 (%)		
	第 1 次 産 業	第 2 次 産 業	第 3 次 産 業	計	第 1 次 産 業	第 2 次 産 業	第 3 次 産 業
与 論 島	1,019	1,365	1,262	3,646	(31.9) 27.9	(41.7) 37.4	(26.5) 34.5

注) 昭和55年国勢調査による。()内の数字は昭和50年国勢調査による。

分類不能の産業を含む。

Ⅲ 図幅内の地域の特性

〔沖永良部島〕

沖永良部島は、鹿児島県本土の南方約460kmに位置し、東北東から西南西に長軸をもつ芋形の94.5km²の島で、北北東から南南西に孤状に連なる奄美群島の中で南から2番目、与論島と徳之島の間に位置する。

地形は、最高点で246mの大山と188.6mの越山の山頂付近に丘陵地があるほかは、隆起珊瑚礁の低平な台地状の島である。台地は数段の段丘となっており、南部においては大山を中心とする同心円の段丘で、石灰岩の地質のためカルスト地形が発達し、無数のドリーネが存在する。低地としてはカルスト地形の凹陷地である後蘭盆地と余多川の谷底平野がわずかにあるだけである。海岸は石灰岩の切り立った断崖になっているところが多い。河川では余多川が常流水系を持つほかは、鍾乳洞等で伏流水になっている。特に南部においては鍾乳洞が発達しており、昇竜洞、水連洞等が代表的なものである。

地質は先第三系で凝灰岩、砂岩、泥質岩等からなる根折層、輝緑岩や、これを貫入する花崗閃緑岩、ひん岩、石英斑岩岩脈を基盤とし、これらを不整合に被って、石灰岩、石灰質礫岩等からなる琉球層群が島の全域にわたって段丘状を呈して分布している。沖積層は河川の発達が悪いため見るべきものはない。島の周囲に現生のサンゴ礁があり、和泊の長浜、知名のウジジ浜には砂丘が発達している。

気候は亜熱帯海洋性で年間平均気温22.3℃、年平均降水量2,174mmである。平均気温は海洋の影響が大きく、平均気温の最も低い1月・2月も16度台で霜をみることはなく、夏の7月・8月との温度差は12℃と小さい。

降水量は、地形が平坦であるため、同じ奄美群島の奄美大島の名瀬に比べて平均して少な目である。降水量の集中するのは梅雨と台風の5月～9月である。また、冬期においても高気圧の周辺に位置するため、ぐずついた天気が多く降水量はやや多い。

台風の襲来は6月頃から始まり、8月に最も多い。この地域での台風の移動速度が遅いうえ、接近する台風の大部分は最盛期のものであるため、しばしば台風の猛威にさらされる。

冬の季節風も台風と同様、空路及び海上交通、農作物等に影響を与えている。

定期航路は鹿児島との間に1日1往復、沖縄との間に1日1往復等がある。

空路は鹿児島との間に2往復、奄美大島と1往復、与論島經由那覇と結ぶ路線もある。

島内の道路網は主要地方道の知名沖永良部空港線、一般地方道の国頭知名線、瀬名和泊線、下平川内城線等があり骨格道路となっている。

表Ⅲ-1 平均気温・平均降水量

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
気温	16.1	16.3	17.5	20.5	23.0	25.9	28.2	28.3	27.2	24.9	21.3	18.1	平均 22.3
降水量	125.5	115.3	139.1	179.8	270.7	279.5	267.8	163.3	196.8	177.1	143.7	115.2	2,173.9

注) 鹿児島県の気象百年誌 (1951～1980年)

〔与論島〕

与論島は、鹿児島本土から南方約500km、奄美群島の最南端に位置するほぼ円形の20.8km²の島で、沖縄本島とはわずかに23km足らずの距離にある。

地形は、極めて低平な島であり、最高点が97.2mのほとんど隆起珊瑚礁からなる台地状の島である。島の中央附近に南北に走る断層崖とその崖の東半を南北に分ける東西に走る崖がみられる。

地質は、粘板岩・砂岩・石灰岩・チャート等と火山性岩石で、緑色塩基性岩、凝灰岩等からなる中生代の立長層が基盤を構成し、石灰岩・砂・礫からなる数枚の洪積世の琉球層群がこれらを不整合に広く被っている。

沖積層は河川がほとんどないため大金久海岸等の砂丘や窪地の粘土・砂・礫層等がわずかにみられる。

気候は沖永良部島と同じ、亜熱帯性海洋性気候である。

定期航路は鹿児島との間に1日1往復、沖縄との間に1日1往復等がある。

空路は鹿児島との間に1日2往復、沖永良部島との間に1往復、那覇との間に1往復の路線がある。

島内の道路網は一般地方道の与論島循環線があり、帰路道路となっている。

IV 主要産業の概要

〔沖永良部島〕

沖永良部島の2町の昭和57年度における純生産額及びその産業別構成比は表IV-1に示すとおりであり、純生産額は県全体の0.79%（就業人口県対比1.02%）を占めている。

表IV-1 町内純生産額

市町村名	純生産額（千円）	構 成 比（%）		
		第1次産業	第2次産業	第3次産業
和泊町	10,996,352	22.1	24.7	53.2
知名町	9,340,501	25.7	19.4	54.8
合計	20,336,853	23.8	22.3	54.0

注）昭和57年度市町村民所得推計報告書

産業別構成比では、第3次産業が54.0%を占めて最も高く、以下第1次産業23.8%、第2次産業の順であり、第1次産業の比率が比較的高い。

純生産額に占める業種別の比率をみると、輸送野菜、花き類、さとうきびと畜産との複合経営の確立している農業が20.7%と最も高く、サービス業19.5%、建設業15.3%、公務12.8%、卸・小売業10.1%、金融・保険・不動産業6.9%が上位を占めている。

沖永良部島においては、台地状の平地が多く農地に恵まれており、島面積の43.5%を占めている。隆起珊瑚礁（石灰岩）の台地のため見るべき河川もなく水源に乏しいが、かんがい排水施設とほ場の整備が進められている。

農業は、亜熱帯性の気候を生かしたさとうきびを中心として、さといも、ばれいしょ等の輸送野菜、テッポウユリ、フリージア等の花き園芸、たばこ等と肉用牛の複合経営が行われており、農家所得は県内で上位にある。

林業は、総面積に対する林野率が11%と小さく、林業生産活動はほとんど行われていない。樹種はイタジイ、イジュ、モクダチバナを優占種とする常緑広葉樹とリュウキュウマツなどである。

水産業は、四方を海に囲まれ、西側を流れる黒潮の本流にのる回遊漁や近海に数多く点在する曾根の瀬付魚族の好漁場がありながら、産業に占める割合は低い。

これは台風、季節風などの諸条件に制約され、消費地に遠いなどその活用が十分に図られていないためである。

漁船は5t未満であり、瀬漁の一本釣りの沿岸漁業が大部分である。

工業は、さとうきびが基幹作目であり、製糖工場が和泊町、知名町に各1工場あるほか、黒糖を主原料とする黒糖焼酎の製造等の食料品製造業が多く、奄美群島の基幹産業の大島紬も盛んであるが、零細で家内労働者が主である。

商業は卸売業の割合が非常に小さく、大部分が小売業であり、地域の拠点として、和泊町の和泊、知名町の知名に商店街の形成がみられる。

観光は奄美群島の地域経済において、重要な比重を占めている。沖永良部島はユリ、フリージアなどの花と昇龍洞、水連洞などの鍾乳洞、海食崖の田皆岬、珊瑚礁海岸など国立公園に指定された自然景観など観光資源に恵まれている。しかし、昭和49年をピークに観光客の減少が続いており、沖縄、奄美各島との連携を図りながら、花と鍾乳洞などの観光資源を生じた特色のある観光地の形成を図る必要がある。

表IV-2 地域の工業及び商業

町名	工業										商業					
	事業所数								従業者数			生産品出荷額 (百円)	商店数	従業員数	年間販売額 (百円)	
	総数	食料品	繊維衣服	木材・木製品	化学	窯業・土石	鉄鋼	諸機械	その他	計(人)	4人以上(人)					1~3人(人)
和泊町	23	15	2			5			1	239	210	29	5,012	225	560	6,377
知名町	21	15	1			2		1	2	102	79	23	541	200	507	5,401
計	44	30	3			7		1	3	341	289	52	5,553	425	1,067	11,778

注) 工業：昭和58年工業統計調査結果による。

商業：昭和57年商業統計調査結果による。

〔与論島〕

与論島の昭和57年度における純生産額及び産業別構成比は表Ⅳ－3に示すとおりであり、純生産額は県全体の0.27%（就業人口県対比0.43%）である。

表Ⅳ－3 町内純生産額

市町村名	純生産額（千円）	構 成 比 （%）		
		第1次産業	第2次産業	第3次産業
与 論 町	6,944,518	17.7	26.0	56.2

注）昭和57年度市町村民所得推計報告書

産業別構成比では、第3次産業が56.2%を占めて最も高く、以下第2次産業26.0%、第1次産業の順であり、第3次産業の比率が極めて高い。

純生産額に占める業種別の比率をみると、観光の島であるためサービス業が29.7%と飛抜けて高く、建設業20.4%、農業11.6%、卸小売業11.2%、公務7.5%が上位を占めている。

与論島は隆起珊瑚礁からなる平坦な島で、耕地率が50%を越え、さとうきびを基幹作物として、近年伸びてきたじゃがいも、さといもなどの輸送野菜との複合農業が進められている。

林業はほとんど行われていない。

水産業は漁船が5トン未満で、沿岸の瀬物類である。

工業は基幹作物のさとうきびを製糖工場、黒糖を主原料とする黒糖焼酎の製造業などの食料品製造業、木材・木製品製造業などがある。

商業は従業員1～4人の小規模な小売店がほとんどで、茶花に商店街を形成している。

観光は与論島の主要産業であり、東洋の海に浮び輝く1個の真珠と称せられる白い珊瑚礁の砂浜、エメラルド色の澄んだ海、亜熱帯海洋性気候など、若者に人気のある観光地となっている。しかし、海外、沖縄などへの流出によって、かつての与論島ブーム時ほどではなく減少傾向にあるが、沖縄経由の流入も多くなっている。今後、沖縄との連携を図るとともに、施設の整備を進める必要がある。

表IV-4 地域の工業及び商業

町名	工業											商業				
	事業所数								従業者数			生産品出荷額 (百万円)	商店数	従業員数	年間販売額 (百万円)	
	総数	食料品	繊維衣服		化学	窯業・土石	鉄鋼	諸機械	その他	計 (人)	4人以上 (人)					1～3人 (人)
与論町	8	4		2		1			1	119	110	9	1,615	155	292	2,368

注) 工業：昭和58年工業統計調査結果による。

商業：昭和57年商業統計調査結果による。

各 論

I - 1 地形分類（沖永良部島）

「沖之永良部島」図幅内の地形、つまり沖永良部島の地形は、隆起珊瑚礁を主とする低平な台地地形と一括することができる。作業基準による山地該当地域がないので、記述は丘陵地から始める。

1. 丘陵地

1. 1 大山丘陵地

島の西半部は大山246mを中心とする半径4kmほどの緩やかな円錐形を示している。このうち大部分は隆起石灰岩によるカルスト台地を形成しているが、頂上部にはやや浸食谷の発達した地形が見られるので、作業基準に従い、丘陵地Ⅱとして分類した。

1. 2 越山丘陵地

大山の東方に、越山188.6mを中心とする丘陵がある。起伏量100mを越える部分がわずかあるが、全体として大山丘陵地によく似た地形であることと、絶対高度が大山より低いことを考慮して、同じく丘陵地Ⅱに分類することにした。

2. 台地

2. 1 大山周辺台地

大山丘陵地を囲むように発達する地帯で、下部から低位カルスト台地、カルストを欠く丘陵性地帯、上位カルスト台地と同心円状に配列している。図にはドリーネのうち、図記できる大きさのもののみが示されているが、現地にはこのほか無数の小凹地が存在する。河谷はかなり発達しているが、通常は流水がほとんどない。河谷の両岸は台地面と著しい対照を示す急斜面を形成しているので地形分類では崖の記号によって表現することにした。ドリーネは周囲に小崖をめぐらすものと、ゆるやかに低下しているものがあるが、後者はとくに低位台地面に多い。

2. 2 和泊台地

島の東半部を占め、大山周辺台地に比べドリーネが少ない。

3. 低地と海岸

3. 1 後蘭盆地

大山、越山の間が存在し、島最大の盆地となっている。やはりカルスト地形の凹陷地である。

3. 2 余多低地

島における数少ない常流水系をもつ河川の一つ余多川の流域で、余多川の浸食による谷

底平野である。しかしこの河川も海岸から直線距離100mほどの所で洞窟中に吸い込まれてしまう。従って余多低地も後蘭盆地と同様、もともとはカルスト凹陷地であったと考えることができる。これを地表流水としての余多川が多少改変したわけである。

3. 3 海 岸

海岸は石灰岩の切り立った断崖になっているところが多く、絶壁の一部にはオーバーハングも見られる。浜をなしている所にはビーチロックが存在することが多い。

また裾礁がよく発達している。

4. 起伏量と傾斜分布

起伏量は最高でも150mに過ぎず、鹿児島県内の図幅でも与論島図幅に次いで起伏量の小さい図幅となっている。

それにつれて傾斜度も小さいが、大山周辺に最大の度数5を示す部分がある。海食崖の部分は幅が狭いので省略したが、傾斜度で言えば7に相当する。

(米谷 静二)

I - 2 地形分類（与論島）

概観 与論島はきわめて低平な島であり、最高点でも97.2mにすぎない。これは鹿児島県のすべての5万分の1地形図中、最も低いものである。全島ほとんど隆起石灰岩より成る台地である。島の中央やや西よりを南北に走る顕著な崖により、島は東部の高い台地と西部の低い台地に分けられるが、東部はさらに東西に走る崖によって東北台地と東南台地に分けられる。

1. 台地

1. 1 東北台地

島の東北部を占め、面積的には島のほぼ半分にあたる。現在の島のほぼ中央を中心とする同心円状の配列を示す3列の隆起保礁があり、その間が相対的な低所を作っている。地形分類図ではこの旧保礁の両側の比高数メートルの崖を黒線をもって表現した。

中央部に丘陵と表現する方がより適切と思われる傾斜地があるので、丘陵Ⅱの着色をした。

1. 2 東南台地

97.2mの三角点を頂点とし、南方および東方へ緩斜する石灰岩の台地である。台地端に浸食谷が見られる。

1. 3 西部台地

標高10mから20mにわたる低位の石灰岩台地で、ドリーネの発達が著しい。

2. 海岸

海岸のかなりの部分が海食崖かまたは磯に相当する。磯はほとんど全部、旧裾礁の珊瑚石灰岩より成り、ノッチを作ってオーバーハングする所が多い。

珊瑚砂を主とする海浜堆積物を多く集めている浜には、ビーチロックがよく発達している。

南部海岸のチチ崎付近にはきわめて多様な海食微地形が見られる。

ほぼ全島をかこんで保礁が発達している。

3. 起伏量と傾斜分布

起伏量は最大でも90mできわめて小さく、傾斜度も1ないし2のところが多い。中央部及び海岸に見られる崖は急傾斜で傾斜度7に該当するが、幅が狭いので傾斜度分布図からは省いてある。

（米谷 静二）

II-1 表層地質（沖永良部島）

沖永良部島は鹿児島市の南南西およそ540kmの洋上に位置し、南は太平洋、北は東支那海に面する。周囲60.3km、面積94.5km²、北東—南西方向に20kmの延長をもった島である。最高が大山の245.9mという低平な島で、島の南西部の最も幅が広い地域の中心に位置する。

島を構成する地質は、先第三系（古生層？）の堆積岩類、輝緑岩と、これに貫入する花崗閃緑岩、ひん岩、石英斑岩岩脈を基盤とし、これをおおって石灰岩質の琉球層群が広く分布する。島には全域にわたり平坦な段丘地形が見られ、島の南西部で200m、北東部で100m以下で顕著である。完新世堆積物は段丘面上の凹地および海岸部に分布する。島の周囲には砂丘とサンゴ礁が発達し、一部にはビーチロックもみられる。

降雨は石灰岩台地を地下に浸透するため、河川の発達はきわめて悪く、わずかに奥川、余多川があるが平常は川口に流水がみられるに過ぎない。したがって住民は、海岸部の湧水か暗川（くらごう）の水など地下水を利用し、あるいは人工的なダムや貯水池を構築して用水をまかなっている。

気候が高温多雨のため、風化が進み新鮮な岩類の露出が比較的少ない。

1. 未固結堆積物

河川の発達が悪いいため、いわゆる沖積層としては見るべきものはないが、余多川流域や後蘭、大城などには運積土による未固結堆積物が見られる。また島の周囲には現生のサンゴが生育し、海浜にはサンゴ・有孔虫・貝などの破片を多く含む未固結の海岸砂や砂丘が見られる。

1. 1 粘土・砂・礫

和泊町西部の後蘭、大城、知名町余多川流域などにみられるほか、石灰岩の凹所を埋めて散点する。これらの堆積物が分布する地区は水田として利用されている。一般に赤色を呈しサンゴや石灰岩の砂礫を含むが、粘土質のものが多い。

1. 2 砂（砂丘）

和泊部落の長浜、知名部落のウジジ浜には幅200mにおよぶ砂丘が発達する。サンゴ破片や有孔虫の遺骸を多量に含む中粒ないし粗粒の未固結の砂および礫からなる。北部国頭岬、長浜の砂丘には古土壌を挟むものがある。小規模な砂丘は他にも見られるが、概して太平洋側に多い傾向がある。

1. 3 砂・礫

島の周囲の海浜には、多量のサンゴや貝の破片、有孔虫殻、および付近を構成する岩石

から由来した砂礫などからなる石灰質砂礫が堆積して砂浜を形成している。これらは島の東南部によく発達する。

2. 半固結堆積物

鉱物や岩片など陸源性碎屑物からなる半固結堆積物で、琉球石灰岩の下部層とし発達する。

本島に分布する琉球層群を、ここでは中川（1967）にしたがって3層に区分した。各層とも、上部は礁性石灰岩よりなるが、下部には砂礫など陸源性非石灰質碎屑物が卓越する部分をともなう。

この陸源性砂礫岩相は下位の基盤岩類との不整合面上に基底礫岩として、また琉球層群中の各層下位にみられる。いずれも、基盤岩類から多量の砂礫の供給をうけた陸地周縁相の性格をもつ。厚さは、1～2 mから50 m以上に達することもあり、礫種は、基底岩類の種類を反映して、分布地によって砂岩、塩基性変成岩、花崗岩などが卓越する。

一般に固結度は低く、しばしば成層し、斜交層理がみられ、側方にも変化する。また上部の石灰質砂礫層および石灰岩など、より固結した岩石とは漸移することがおおい。

矢護仁屋岬、沖泊、新城、内喜名などの海岸急崖では下底部に巨礫を含むことがある。また内陸部では、大山周辺、屋子母、新城、越山、田皆などによく発達し、黄褐色砂礫質のものが多いが、なかには大礫を含むものや、青灰色の粘土や泥層をはさむものもみられる。

図幅においては、上述の岩相をもつ琉球層群中の陸源碎屑相を半固結堆積物として、おもに中川（1972）にしたがって示した。

3. 固結堆積物

固結堆積物としては、根折付近を模式地とする泥質岩、砂岩およびこれらの互層からなる堆積岩と、琉球層群中の石灰岩、石灰質砂礫岩がある。

3. 1 泥質岩・砂岩・砂岩頁岩互層（根折層）

和泊町根折付近から国頭にかけての脊梁部に分布するほか、北東部の海岸、南西部の北海岸の崖下などに断続的に露出する。灰黒色の泥質岩（粘板岩）が卓越するが、中粒ないし粗粒の砂岩およびこれらの互層部もみられる。一般には風化が著しく、海岸部のものを除いては、表面は脆弱化している。走向は東北東で島の延長方向とほぼ一致しているが、東部海岸では東に、西部では西に傾斜する。断層も、走向方向のものと、これを切るものがみられるが、全体の構造は明らかでない。また凝灰岩・輝緑岩との関係も不明な点が多い。

3. 2 石灰岩（琉球層群）

大山山頂から越山、国頭にかけての島の脊梁部を除き、ほぼ島全域にわたって琉球層群

が分布する。本層群は、先第三系の根折層を不整合におおい、分布高度によって、高位・中位・低位の3層に区分される。各層の中および上位を構成して石灰質砂礫および石灰岩よりなる部分が発達する。

一般に白色ないし淡褐色を呈し、多孔質である。石灰質砂礫岩はほとんどが化石破片の集合よりなる。化石としては有孔虫殻と石灰藻片がおもで、ほかに蘇虫類、ウニ、二枚貝、巻貝も普通にみられる。またサンゴおよび石灰藻が卓越したサンゴ石灰岩も普遍的にみられる。風化すると赤色土壌となり、また溶食により大小のドリーネや、水連洞・昇龍洞など石灰洞を形成する。

4. 火山性岩石

本島にみられる火山性岩石は、凝灰岩、輝緑岩、および岩脈として石英斑岩、ひん岩がある。

4. 1 凝灰岩（根折層）

南西部大山付近にもっとも広く分布するほか、田皆岬、沖泊など西北海岸に、また東部西原付近にもわずかに露出する。

淡緑色ないし灰緑色の細粒岩であるが、大山付近のものは風化が著しく、千枚岩状に変質し、表面は軟弱化し、新鮮なもののみられない。砂岩や泥質岩を伴い層理のみられることが多い。また田皆岬では北北東の走向をもち、西に傾斜し、琉球層群の半固結円礫岩層によっておおわれている。根折付近にも分布するが根折層の砂岩・泥質岩との関係は不明である。

4. 2 輝緑岩

北東部国頭付近に分布する、暗緑色を呈する堅硬緻密な岩石である。肉眼的には斑晶も明らかでなく、おそらく、塩基性溶岩ないし同質の凝灰岩の変質したものである。同種のものが大山南部にも僅かに分布する。本岩も根折付近に分布する砂岩・泥質岩などを主とする根折層との関係は不明であるが、琉球層群中の陸源性堆積物の中には巨礫・大礫として含まれている部分がある。

4. 3 石英斑岩

島の北東部西原、国頭において、根折層を貫いた数mないし10数mの小岩脈としてみられる。風化が著しく、黄褐色を呈し、軟弱化している。

4. 4 ひん岩

西原、喜比留において根折層を貫く岩脈としてみられる。暗灰色ないし黒色で比較的堅

硬なため、一部で骨材として利用されたこともあるが、露出範囲は狭小である。

5. 花崗岩質岩石

本島の中部越山を中心として露出する。優白色の粗粒岩で、石英・長石類・雲母・角閃石を含む花崗閃緑岩である。根折層に貫入し、一部に接触変成を与えている。本深成岩体は風化が著しく、ほとんどマサ土化し、新鮮な部分は露出していない。

6. 石 材

面積の小さい島であるため、石材の需要も限られている。したがって、必要に応じて石灰岩・粘板岩・輝緑岩が碎石の対象として利用されている。

また、田皆岬において結晶質石灰岩がトラバーチンとして採掘出荷されたことがある。

II-2 表層地質（与論島）

与論島は鹿児島県最南の島である。沖永良部島の南南西27kmにあり、南北約5km、東西6km、最高点97mの小島である。島の中央からやや西よりに南北に走る断層崖があり、これを境として東西で地形を異にする。西側は10~20mの平坦地で特徴づけられる低地である。一方、東側では、その南部を東西に走る断層崖で、さらに南北に二分される。北部ではほぼ同心円状に海岸線にまで取りこんだ段丘状地形がみられ、南側では最高点97mから南東に20mまで低下する台地をなし海岸に達する。

面積21km²の小島のため、河川としてみるべきものはなく、東海岸に砂丘が発達するほかは未固結堆積物の分布も少ない。島の周りには現生サンゴ礁がよく発達しており、干潮時にはその一部は離水する。

島を構成する地質は、先第三系の基盤岩類と、これを不整合におおって広く発達する琉球層群が主で、わずかに現世の砂丘砂と海浜砂礫がみられる。基盤岩類は中川（1967）によって立長層と命名された。本層は石灰岩、粘板岩、チャート、砂岩、輝緑岩、凝灰岩などから構成されている。

1. 未固結堆積物

いわゆる沖積層としては見るべきものはないが、わずかに南西部伊波海岸と北東部の段丘面凹地、砂丘の構成物としてみられる。

1. 1 粘土・砂・礫

伊波海岸ハキビナ浜、および茶花~立長間の低地にわずかにみられる。また島の北東部には基盤岩類を取りまき琉球層群が発達し、同心的な楕円形の低起伏段丘地形をなすが、この起伏の谷部を埋めて粘土、砂、礫で構成された黄褐色の未固結堆積物が分布する。いわゆる沖積層であるが、いずれも厚さは数m以下である。

1. 2 砂

海岸砂丘を構成して、島の東、出毛海岸、北部賀義野海岸でみられるほか茶花付近にも僅かに分布する。中粒ないし粗粒の未固結砂礫よりなり、砂は主に磨耗された有孔虫殻であるが、ほかに少量のサンゴ破片などをふくむ。部分的に固結しているところもある。

1. 3 砂・礫

島の周囲海浜には有孔虫遺骸を主体とし、サンゴや石灰藻、貝殻の破片からなる未固結堆積物が分布する。基盤岩類が露出する部分ではこの中に陸源性砕屑物が混入している。また、しばしばその一部が固結しビーチロックとなっている。ビーチロックは20~40cmの

厚さで海側にわずかに傾斜している。

また立長および空港付近の標高20~25mの平坦面を2~3mの厚さでおおう段丘礫がみられる。礫は基盤、岩類から由来した円礫からなり、基質は赤褐色の粘土、砂で充填されている。

2. 半固結堆積物

鉱物や岩片など陸源性碎屑物からなる半固結堆積物で、琉球石灰岩の非石灰質部とし発達する。

本島に分布する琉球層群は、中川(1967)によって、城層と那間層に区分されている。その上部は礁性石灰岩よりなるが、下部には砂礫など陸源性非石灰質碎屑物が卓越する部分をともなう。あるいは基盤岩に近い部分が、沿岸性堆積物として陸源性の物質に富んだ相になっているとも解釈できる。

この陸源性砂礫岩相は下位の基盤岩類との不整合面上に基底礫岩として、また琉球層群中の礁性相の下位にもみられる。いずれも、基盤岩類から多量の砂礫の供給をうけた陸地周縁相の性格をもつ。厚さは1~2mから30m以上に達することもあり、礫種は、基底岩類の種類を反映して、分布地によって砂岩、石灰岩、塩基性変成岩、輝緑岩などが卓越し、しばしば大礫を含むことがある。

一般に固結度は低く、しばしば成層し、斜交層理がみられ、側方にも変化する。また上部の石灰質砂礫層および石灰岩など、より固結した岩石とは漸移することがおおい。

図幅においては、上述の岩相をもつ琉球層群中の陸源碎屑相の部分を半固結堆積物として示した。

3. 固結堆積岩

与論島にみられる固結堆積物としては、南西部立長付近に分布する立長層と、琉球層群の礁性石灰岩の固結部がある。前者は、その地表的な分布は南部地域に限られるが、後者はこれを覆ってその北東部周辺を中心にきわめて広範囲に分布する。しかし、琉球層群の分布する地域でも、多くの地点で、地表から5~30mの深度で基盤をなす立長層に到達することが知られているし、琉球層群の下部には立長層から由来した大小の礫が多量に含まれていることも、基盤岩に近いことを物語っている。

3. 1 石灰岩・粘板岩・珪岩・砂岩・凝灰岩(立長層)

立長付近を模式地とするもので、本島の基盤岩全体を指す。立長付近一帯での本層は、粘板岩、砂岩、石灰岩、凝灰岩、珪岩などその岩種は多い。粘板岩は、黒色を呈し、やや千枚岩質で砂岩をともなう。石灰岩は、白色で、やや片岩状をしめす。

(露木 利貞)

Ⅲ 土 壤

本図幅は沖永良部島と与論島を含む。

沖永良部島は島内最高地の大山（標高245.9m）の中腹以上、及び越山以東のなだらかな丘陵地帯は古生層に属し、大山の中腹以下の低地は厚い琉球石灰岩層に属し、海岸線はすべて石灰岩層が露出している。土壤は大山の中腹以上と越山の丘陵地帯に褐色森林土が、越山から東のなだらかな丘陵地帯に赤色土が分布する。大山の中腹以下と他の大部分の丘陵地帯は暗赤土が分布する。また、海岸地帯は岩屑土（含・岩石地）と砂丘未熟土も分布する。

与論島は琉球石灰岩で覆われていて、わずかに立長に古生層が露頭している。土壤は琴平の段丘と島の中央部に褐色森林土が分布するほかは大部分が暗赤土である。海岸部は石灰岩が露出し、また、砂丘未熟土壌がみられる。

1. 岩屑土（含・岩石土）

1. 1 岩屑性土壌（L）

海岸地帯の急傾斜地などに分布し、絶えず潮風が吹き上げるので礫間の土壌は大きな堅果状ないし塊状となっているものが多い。

なお、本土壌には局部的に存在する岩石地も一括した。

2. 未熟土

2. 1 砂丘未熟土壌（RC）

海岸線は各地に砂丘が発達している。この砂丘地に分布する海砂よりなる土壌が砂丘未熟土壌である。全層黄褐から灰黄白の砂土で、一般にち密度は疎で、腐植の集積は少なく、乾燥しやすい。構造の発達は殆んど認められない。なお、本土壌はサンゴ礁に由来する海砂を主な母材とするため、石灰分などが豊富でpHの高いものが多い。また、本図幅では一部の海岸線に分布する海砂や砂礫よりなる土壌も本土壌群に包括した。

3. 褐色森林土

3. 1 乾性褐色森林土（黄褐色）（B（Y）—d）

尾根部や丘陵地に分布する土壌である。表土は一般に薄く、深さ50cm内外で堅果状構造が発達する。下層は岩盤または礫層となっているものが多い。

3. 2 褐色森林土壌（黄褐色）（B（Y））

沢筋で潮風が吹きこむことの少ない場所にある。一般に弱酸性で本土暖帯南部の褐色森林土に比べて表層土の腐植含有量が低く、薄くて重粘な土壌である。

4. 赤黄色土

4. 1 赤色土壤 (R)

丘陵地帯には5 YRまたはこれより赤味の強い色相を有する土壤が割合に広く分布する。本調査ではこれを赤色土壤として示した。

本土壤は主に角閃石を含む凝灰岩など赤色になりやすい母材からなり、強粘質土壤で土層は一般に厚く生産力は比較的に高い。低い丘陵地などに分布するものは国頭礫層などの影響を受けたものが多い。また、表層はりん酸や石灰、苦土などの塩基類に欠乏し酸性化のはなはだしいものが多い。

4. 2 黄色土壤 (Y)

丘陵地帯には作土下の土色が7.5 YRまたはこれより黄味の強い色相を有する土壤が分布する。本調査ではこれを黄色土壤として示した。本土壤は砂岩、頁岩などの風化物に由来するものが主であるが地形、場所によって断面形態、植生に若干の違いがみられる。一般に表土は薄く、腐植含量の少ない壤質～強粘質土で有効態りん酸や石灰、苦土などの塩基類に欠乏したものが多い。

4. 3 暗赤色土壤 (DR)

琉球石灰岩に由来する土壤で沖永良部島、与論島に広く分布する。

表土は主に暗赤褐色、下層土は明赤褐色の重粘土壤で、有効態りん酸に欠乏したものが多いが、石灰や苦土などの塩基類は豊富で特に下層土はpH高く塩基性を呈するのが普通である。

なお、この土壤には水田利用のために斑紋の集積などが認められるものも含まれた。

5. グライ土

5. 1 細粒グライ土壤 (G-f)

50cm以内にグライ層の存在する土壤で、土性は主に粘質で、丘陵地や低い台地の低位部に分布する。一般に排水が悪く地下水位の高いものが多い。

本図幅では沖永良部島中央部の後蘭、大城、余多地区などに広く分布する。

土地利用、植生及び生産力などとの関連

1. 岩屑土 (含・岩石地)

海岸線の岩石地は海水の飛沫や潮風を強く受け特有の植生を呈している。岩石上には、テンノウメ、イソマツなどがみられ、風化の進んだ岩屑土にはコウライシバやトゲシバが優占している。これらの後方にはアダン林がみられ、クロイゲ、オオハマボウ、ハマイヌビワなどの低木林がみられる。

2. 砂丘未熟土

砂丘地にはハマグルマ、ハマボス、リュウキュウアザミ、クマノギク、クサトベラ、ハマヒルガオ、グンバイヒルガオなどが小群落を作っている。砂丘地が安定してくると、クサトベラやアダン林が発達し、テリハノイバラ、サルカケミカン、ホウロクイチゴ、シャリンバイ、ハマヒサカキ、クロイゲなどが混入している。人工的に海岸防風林としてモクマオウが数十年来植えつがれている。モクマオウはアルカリ土壤に耐えて、生長も早い。与論島の古里浜のモクマオウ林は胸高直径30cm、樹高15mに達するものもある。

3. 褐色森林土

イタジイ、イジュ、モクタチバナを優占種とする森林で、この他モッコク、アオバナ、ハノキ、クロキ、タイミンタチバナ等が混入する。沖永良部島の大山では、スギ、ヒノキ、イジュ、モッコク、ユーカリが植栽されており、常緑広葉樹林内に混在している。それぞれ、潮風の影響を受けない所で生育は良好である。大山のこれらの森林は水源かん養機能のうえからも貴重な存在となっている。

4. 赤黄色土

丘陵地帯の赤色土ではリュウキュウマツの造林が多く、耕地防風林の役割をはたしているが、最近マツクイムシの被害を受け枯死し、ヤブニッケイ、ゲッキツ、ハマイヌビワ、トベラ、シマグワ、アカテツ等の自然植生の低木林に変わりつつある。

畑地は大半が普通畑でさとうきび、野菜、切花、球根などが栽培されている。表土は一般に厚いが腐植含量低く生産力は低いものが多い。

黄色土壌は大部分が畑地または水田として利用されている。各種の作物が栽培されているが表土は塩基類の溶脱などにより酸性化しているものも多く、収量は余り高くない。

暗赤色土壌の林地は石灰岩質母材の典型的な植生であるクスノハカエデや、アダン、サルカケミカン、ゲッキツ、ボチヨウジ、ヤブニッケイ等の低木林となっている。これらの地では植栽しても成林はむずかしいと思われ自然植生をいかした公益的な機能面の向上を考える必要がある。

普通畑はさとうきびをはじめ各種の作物が広く栽培されている。土層は一般に深く、石灰、苦土等の塩基類が豊富で土性は中性又は弱塩基性を呈するものが多いが、近年、化学肥料の多施によって土壌の酸性化の著しい地区も認められる。また、保水力の小さい地区が多く、旱天が続くと干害のおそれ大きい。

5. グライ土

細粒グライ土壌は以前水稻の二期作を行っていたが、現在はさとうきびの作付可能な所

は畑地としてさとうきびを栽培している。

排水が悪くさとうきびの栽培不能な地区は水稻を栽培しているが耕作に不便な所は荒地化し放置されている。

このため排水路等を整備し乾田化をはかること等により土地利用を促すことが必要である。

農地担当者

鹿児島県農業試験場

土壌肥料部長	穂原 関 雄
大島支場長	小原 秀 雄
土壌肥料部主任研究員	林 政 人
大島支場作物研究室長	友野 育 造

林地担当者

鹿児島県林業試験場

瀬戸口 徹
寺 師 健 次

IV 土地利用現況

〔沖永良部島〕

沖永良部島は隆起珊瑚礁の低平な台地状の島であるため、畑地を主とする農地に恵まれている。林地は246mの大山、越山の山頂付近や段丘斜面等に点在している。海岸線に荒地が分布している。

表Ⅳ－1 土地利用現況 (単位ha)

市町村名	田	畑	果樹園	樹木畑	その他の	森林	荒地	用建地物	通幹用線地交	のそ用の地他	湖沼	河川地	海浜	面合積計
和泊町	235	2,277	0	0		970	82	325	0	44	0	0	67	4,036
知名町	227	2,173	0	0		2,494	80	284	0	50	0	0	34	5,355
合計	462	4,450	0	0		3,464	162	609	0	94	0	0	101	9,391

注) 国土数値情報(土地利用)による。

1. 市街地, 集落, その他

和泊町の役場所在地の和泊, 知名町の役場所在地の知名には商店等も多く, 市街地を形成している。

主な集落は和泊町の国頭, 手々知名, 喜美留, 玉城, 知名町の田皆, 瀬利覚, 小米, 住吉などである。その他として, 和泊町の国頭に沖永良部飛行場, 大山の山頂付近に自衛隊の施設がある。

2. 農地

水田は, 大城の北部と余多付近に小規模な分布がある。後蘭の北部や赤嶺南部の水田は畑地になっている。

沖永良部島の東北部は平坦な段丘状の地形で, 畑地に恵まれ, 南西部は大山の山頂部以外は琉球石灰岩に被われ, 大山を中心に同心円状の段丘及びカルスト地形が発達し, 普通畑として利用されている。普通畑では, 基幹作物のさとうきび, さといも, ばれいしょ等の輸送野菜のほか, テッポウユリ, フリージアの球根及び切花のグラジオラスなどが作付けされている。

表Ⅳ-2 地域の農地面積

(単位ha)

市町村名	経営耕 地面積	田	畑				樹園地					草 地
			計	普通畑	牧草 専用	休作 畑※	計	果樹園	茶園	桑園	その他 樹園地	
和泊町	1,875	41	1,833	1,797	2	33	1	0			0	4
知名町	1,482	34	1,447	1,404	11	32	2	2		1		4
計	3,357	75	3,280	3,201	13	65	3	2	-	1	0	8

注) 1980年世界農林センサス結果

※過去1年間作付けしなかった畑

3. 林 地

昭和58年度鹿児島県林業統計によると、林野面積は総面積の10.9%で県全体比64.2%に比べて極めて小さい。

国有林はなく、公私有林で占められており、樹種別では表Ⅳ-3のとおり針葉樹50.3%、広葉樹44.8%、その他4.1%等で人工林率31.4%。

表Ⅳ-3 地域の林野面積及び樹種別林野面積

(単位ha)

市町村名	総面積	林野面積	国有林	国有 林率 (%)	公 私 有 林					
					計	針 葉 樹	広 葉 樹	竹 株	そ の 他	人工 林率 (%)
和泊町	4,117	274	-	-	274	214	49	-	11	11.3
知名町	5,337	755	-	-	755	304	412	6	31	38.7
計	9,454	1,029	-	-	1,029	518	461	6	42	31.4

注) 昭和58年度 鹿児島県林業統計による。

4. 荒 地

海岸の急崖地、隆起石灰岩の海岸カルスト、離水珊瑚礁、砂浜など海浜地に分布する。

[与論島]

与論島は隆起珊瑚礁の低平な島であり、平坦地が多く、畑地を主とする農地に恵まれ耕地率は50%を超えている。

林地は断層崖の斜面部や海岸線等に点在している。

表Ⅳ－４ 土地利用現況

(単位ha)

市町村名	田	畑	果樹園	樹木畑 その他の	森林	荒地	用建 地物	通幹 用線 地交	のそ 用の 地他	湖 沼	河川 地	海 浜	面合 積計
与論町	384	1,124	0	0	222	51	183	0	21	0	0	56	2,056

注) 国土数値情報(土地利用)による。

1. 市街地, 集落, その他

与論町役場のある茶花には商店, ホテル, 飲食店等が多く市街地を形成している。

また, 主な集落は, 東区, 那間, 立長, 古里, 朝戸などである。

その他として, 島の西部, 茶花港の南に与論空港がある。

2. 農地

全面積の50%以上を占める耕地のほとんどが普通畑で, さとうきびを基幹作物として, ばれいしょ, 石川さといもの輸送野菜などの複合化が進められている。

水田は島の東部に分布していたが乾田化, 畑地化されほとんど残っていない。

表Ⅳ－５ 地域の農地面積

(単位ha)

市町村名	経営耕 地面積	田	畑				樹園地					草地
			計	普通畑	牧草 専用	休作 畑※	計	果樹園	茶園	桑園	その他 樹園地	
与論町	851	10	840	802	1	37	1	—	—	—	1	0

注) 1980年世界農林センサス結果

※過去1年間作付けしなかった畑

3. 林地

林地は断層崖斜面, 段丘斜面, 海岸部に分布している。

昭和58年度鹿児島県林業統計によると, 林野面積は総面積の5.3%と極めて小さい。

国有林はなく, 公私有林で占められており, 樹種別では表Ⅳ－6のとおり針葉樹2.7%, 広葉樹60.4%, その他36.9%等で人工林率56.8%は県平均に近い率である。

表Ⅳ－6 地域の林野面積及び樹種別林野面積 (単位ha)

市町村名	総面積	林野面積	国有林	国有 林率 (%)	公 私 有 林					
					計	針 葉 樹	広 葉 樹	竹 株	そ の 他	人 工 林 率 (%)
与論町	2,082	111	—	—	111	3	67	—	41	56.8

注) 昭和58年度 鹿児島県林業統計による。

(前野 昌徳)

1987年2月 印刷発行

奄美郡島地域
土地分類基本調査
沖永良部島・与論島

編集発行 鹿児島県企画部企画調整課
鹿児島市山下町14-50

印刷 富士マイクロ株式会社
熊本市水前寺6丁目46番1号